学部入学前教育の日本語科目の教育内容と試験で測っているもの

――予備教育での試験と日本語能力試験、日本留学試験――

鈴木　美加（東京外国語大学 留学生日本語教育センター）

０．はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センター（旧東京外国語大学外国語学部付属日本語学校、以下本センター）では、1970 年４月より文科省国費学部留学生（以下学部留学生）定員 70 名[1]を対象として、国立大学の学部に入学する前の１年間の教育を行っている。大学入学後各学生が必要な単位を取り、卒業できることを最終的な目標として、学生が大学学部での勉学に必要とされる日本語やその他の科目の知識の習得と技能の養成を行うため、本センターは日本語や日本事情、学生の専門に応じた科目の教育を実施している。

本センターの学部留学生への日本語教育では、主に大学の授業で必要とされる日本語力をつける、つまり日本語による講義を聞き、日本人学生と同じクラスで課される参考文献を読み、レポートを書き、自分の考えや疑問を述べることができるようになることを目的として、１年間、正味 10 カ月のカリキュラムが編成されている。学生はほとんどが非漢字系で、約９割が日本語を母国で全く習わないか初級の初めの段階で来日する[2]。そのため、日本語のカリキュラムでは、「あいうえお」の学習から始め、上級レベルに至るまでの集中語学教育を行っている。来日時には進学大学は決定しておらず、主に本センターでの成績に基づき、進学先が決定される。本センターの教育において、大学で必要な知識及び技能を身につけ、それがそのまま試験等によって測定されるような評価が求められる。これまで、いくつかの課題はあるものの、大学学部での学習に結びつくように教育及び評価が、既成の試験に縛られずに行われてきた。

本稿では、学部留学生の日本語予備教育カリキュラムの一例として、東京外国語大学留学生日本語教育センターの実践、ここでは教育の目標と内容、評価について概観する。また、評価のために実施している試験を、外的基準として存在する日本語能力試験や日本留学試験で測定していると思われる技能と照らし合わせてみたい。

１．日本語科目のカリキュラムの概要

センターでは、１年を前期、中期、後期と分け、前期をさらに３期に分け、５種類の時間割を作成し、各期に応じた教育を実施している。資料１に 2001 年度時間割を挙げた。理科系学部留学生に対しては「日本語」、「数学」、「化学」、「物理」または「生物」、「日本事情」、「多文化間コミュニケーション」、「英語」の履修を必修とし、文科系学部留学生には「日本語」、「政治経済」、「日本史」または「数学」、「日本事情」、「多文化間コミュニケーション」、「英語」の履修を必修としている[3]。１年の初めには、「日本語」科目の週あたり

---

[1] 2002 年度の学生の出身国は、人数の多い順に、ヴェトナム、モンゴル、ブルガリア、ルーマニア、カンボディア、インドネシア、ラオス、タイ、マレーシア、イラン、コロンビア、ネパール、バングラディシュ、スリランカ、ミャンマー、ハンガリー、オーストラリア、ブラジル、中国（マカオ）、タンザニア、ミクロネシアである。

[2] 各国で行われる国費留学生選考試験において、専門の試験（文系：世界史・数学・英語、理系：数学・化学・物理又は生物・英語）の得点に基づいて選抜される。日本語の試験も行われるが、参考資料としてのみ扱われる。

[3] 英語については、文理とも必要とされた者のみ必修となる。

時間数が大きな比重を占め、日本語での基本的なコミュニケーションが可能になる２カ月目から他の科目の授業が始まり、段階的に専門に応じた科目の授業数が増えていく。
以下に日本語科目について述べる。

A.教育の目標：
大学生活に必要な言語要素を学習し、言語運用ができるよう、日本語科目では以下のような点を念頭において授業を実施している。

1) 年間の目標

a) 語彙：初級から上級までの約 5,500ー6,000 の語彙の意味と使い方を理解し、覚え、四技能での運用ができる[4]。
b) 文字：日本語で使用される平仮名と片仮名計 142 字と、漢字約 1,580 字（初級漢字約 600 字、中級漢字約 620 字、上級漢字とする約 360 字）の読み方と書き方を覚え、運用ができる。
c) 文法（文型）：初級から上級までの約 530 項目の文法を理解し、覚え、四技能での運用ができる。
d) 聴解能力：ニュースやアナウンス、講義等を聞き、必要な情報を得ることができる。
e) 会話能力：日本語のスピーチや、日本人を交えたディスカッションで自分の意見がわかりやすく述べられる。一般の日本人へのインタビューで適切に質問できる。
f) 読解能力：新聞や一般教養レベルの本を読んで、必要な情報を得ることができる。
g) 文章表現能力：小論文によって自分の意見が論理的に述べられる。相手にわかるように説明文が書ける。

2) 各段階での目標

前期（初級：約３ヵ月　週あたり約 15ー16 コマ×12 週[5]　１コマ 90 分）
・初級レベルの言語要素である文法、語彙、文字について理解、記憶し、四技能で使用することができるようになる。
・日常生活に必要とされる基本的な会話の聞き取り及び口頭表現ができ、2,000 字程度の簡単な文章の理解ができ、ごく身近なトピックについて 600 字以上の文章が相手にわかるように書ける。

中期（中級：約３ヵ月半　週あたり約 12 コマ×15 週）
・中級レベルの言語要素（文法、語彙、文字）を理解、記憶し、四技能で使用することができる。
・身近なテーマに関する説明や意見を相手にわかりやすく書いたり、話したりできるようになる。

---

[4] 初級語彙約 2,000、中級語彙約 2,400ー3,000、上級語彙の中の一部約 1,100ー1,600 である。日本語以外の授業でも日本史約 1600、国際関係 455、日本経済（キーワードのみ）500、日本政治（キーワードのみ）420、基礎科学約 1000、基礎科学入門 880、物理 1220、化学 1120、基礎数学 250、微分・積分（キーワード）100、代数幾何 50 の語彙を学習する。文理ともに日本語以外で 3000 から 5000 あるいはそれ以上の語彙を学習する。

[5] （　　）内の期間は授業期間である。試験期間及び研修旅行、見学、オリエンテーション、アセスメントテスト、来日直後に行うひらがな教室等はそれとは別に数えている。

・教師により語彙や文型がコントロールされた、文章の読解及びニュースなどの聞き取りができるようになる。

後期（上級：約２ヵ月週あたり約 10 コマ×7ー7.5 週）

・上級レベルの言語要素を学習し、社会的な問題等に関する説明や意見を相手にわかるように書いたり、話したりできるようになる。

・新聞や一般書等を読んだり、ニュースやアナウンス、講義を聞いたりして、必要な情報が得られるようになる。

C.授業内容と方法

ここでは、年間を通じた教育システムの特徴と、大学での学習のための基礎的な教育と言える中級以降の授業内容とその方法について述べる。

１）年間を通じた教育システムの特徴

a) クラス制を取っている。７ー11 名の学生によるメインクラスを編成し、授業は主にそのクラスで行う。各クラスに主担当の教師をおき、その他に３ー４名の教師が授業を担当する。メインクラスでは、初級から上級までの主に文法、語彙、文字、読解、文章表現の授業を行う。クラスは、多様な文化圏、専門の学生により編成される。

b) 中級以降は技能の養成のために、聴解クラス、口頭表現クラスをメインクラスとは別に編成している。

２）中級以降の授業内容と方法

a）語彙：中級及び上級の主教材テキストの本文に含まれている語彙は、大学での勉学に欠かすことができない語彙が使用されている。学生が予習で調べ、また教師により授業時に導入、解説を行う。

b）文字：中級・上級教材のテキスト本文に含まれる漢字を中心に中級前半 390、中級後半 325、上級約 300）の漢字の導入、小テストを授業で行う。１回分の新出漢字は 13 字が基本となっている。中級では、漢字教材に含まれる関連漢字熟語 750 語について、その意味と使用される文脈に関する学習も行う。学習漢字は初級から合わせて約 1500 字となる。

c）文法：中級・上級のテキストで取り上げているのは、中級前半 139、中級後半 156、上級 34 文法事項で、その他にもテキスト本文中に若干入れ込まれている項目もある。初級から合わせ、合計 600 余の学習を行う。授業では、文型の導入、解説、文作成練習を行う。課題として、各課毎の練習問題が与えられる。

d）読解：レベルに合わせた文章を教材とし、授業中に中級・上級テキスト精読を行い、指示詞の内容理解、事実関係理解、意味解釈、談話の展開の理解等に関し、確認及び説明を行う。また、中級後期には、読解技能養成を目的とした授業を週１回全６コマ程度行われ、ボトムアップ処理促進練習、談話の展開・構造把握練習、多読練習などを実施している。

e）聴解：定期試験の聴解の成績により能力別にクラスが編成され、中期に週１回１コマ 90 分、後期には週２回各１コマの授業を行っている。ビデオ教材や音声テープ教材による正確な情報取り、内容把握、ノート取りの練習、情報再生、会

話中の縮約形の表現に慣れるための練習が行われている。

f）口頭表現：メインクラスとは別に、出身国や男女が偏らないようにクラスが編成される。中級では、場面に応じた会話の練習や、説明や意見表出を目的にした発表や身近な話題によるスピーチ、座談会形式での話し合いなどが行われている。上級では、社会的な問題に関するディスカッションでの意見表出や司会、提題役の遂行、スピーチ、日本人へのインタビューとその報告が学生に課される。

g）文章表現：中級段階では身近な事柄や自分の経験をもとに、800〜1000 字程度の説明文及び意見文を書く課題が２週間に１回出される。課題回収後、個々の学生に課題のフィードバックが行われる。上級段階では、各学生のテーマにより意見文またはエッセイ的な文章をワープロで書く課題と、小論文作成が課される。小論文作成では、主題や構成、展開を考え、引用の方法についても学びながら、完成させるという手順がとられている。

D.評価の内容と方法

評価では、試験による要素が大きいが、授業への出席と参加度など、それ以外の要素も評価に取り入れている。各要素・技能に分け、試験を行っているため、以下に、本センターでの日本語の科目の評価の内容とその方法について、簡単に述べる。その後に、授業への出席率について述べる。2001 年度より、本センターにおいては、対象学生の欠席率が授業コマ数の 20%を超える者は試験を受けることを認めないことが決められたので、その点について触れる。

１）各要素・技能に分けた試験・課題による評価

言語要素としての文字、文法、語彙は四技能を伸ばす上で必須のものであると考え、言語要素の習得の評価と言語技能の評価を独立させて行っている。語彙については、語彙のみを対象とした試験は実施していない。試験は６種に分け、文字、文法、読解、聴解、口頭表現、文章表現の試験となっている。意図としては、各学習項目の習得度や目標とした言語技能のレベルへの到達度を測る試験である[6]。授業で学習した内容を試験範囲として、その範囲から網羅的に、あるいは特に重要だと思われる項目を取り出し、出題されている。試験は、一斉テストの形式で実施される。表１と表２に中期後半（中級ほぼ終了レベル）の試験と、後期（上級初め）の試験の概要を示す[7]。

a）文字

試験での成績が評価となる。基本的な漢字は「書ける」かつ「読める」ことが必要だと

表１　中期後半の日本語科目試験の概要

[6]基本的には到達度試験であるが、読解試験、聴解試験では未習語も含み、熟達度評価の要素が含まれている。

[7] 表内の問題内容について、聴解は『日本語能力試験出題基準』の「聴解試験課題の解説 p.201 に基づいた。読解は『日本語能力試験出題基準』の「タスクの分布と難易」p.228 の問題の性質をもとにした。